

A s i a n J o u r n a l o f  
**H U M A N  
S E R V I C E S**

Printed 2012.0430 ISSN2186-3350  
Published by Asian Society of Human Services

*April* 2012  
**VOL. 2**



## ORIGINAL ARTICLE 4

# 大学生における自死遺族に対する態度と自殺観、死生観との関係

## Attitudes toward suicide survivors, perspectives on suicide and death among Japanese university students

山中 亮<sup>1)</sup> (Akira YAMANAKA)

1) 北海学園大学経営学部

〒062-8605 北海道札幌市豊平区旭町4丁目1-40

yamanaka@ba.hokkai-s-u.ac.jp

### ABSTRACT

本研究では、大学生の自殺観および死生観と自死遺族に対する態度との関連を検討するために、大学生を対象に質問紙調査を実施した。その結果、自死遺族に対する態度として「接触拒否」、「自殺責任の遺族への帰属」、「接触回避」、「遺族支援の必要性」、「同情」、「因果応報」の6因子が抽出された。死生観および自殺観との関連では、自死遺族に対する態度の「接触拒否」が高いと、自殺観の「積極的否定」および「非共感」、死生観の「死からの回避」および「寿命観」が高く、一方自殺観の「共感・救済」が低かった。自死遺族に対する態度の「自殺責任の遺族への帰属」が高いと自殺観の「積極的否定」および「非共感」が高かった。自死遺族に対する態度の「接触回避」が高いと死生観の「死への恐怖・不安」および「死からの回避」が高かった。自死遺族に対する態度の「遺族支援の必要性」が高いと自殺観の「共感・救済」、死生観の「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「死への関心」が高く、一方自殺観の「積極的否定」および「非共感」が低かった。自死遺族に対する態度の「同情」が高いと自殺観の「共感・救済」、「死への拒絶」、「生への執着」、死生観の「死後の世界観」、「死への恐怖・不安」、「人生における目的意識」、「死への関心」そして「寿命観」が高く、一方自殺観の「黙認」が低かった。自死遺族に対する態度の「因果応報」が高いと自殺観の「積極的否定」および「非共感」、死生観の「死後の世界観」、「解放としての死」、「死からの回避」、そして「寿命観」が高く、一方自殺観の「共感・救済」が低かった。以上のことから、特定の死生観および自殺観が自死遺族に対する否定的態度の形成に影響を与える可能性が考えられた。

Relationship among attitudes toward suicide survivors, views on suicide and views on death was investigated in university students. A questionnaire that measured attitudes

Received  
December 22, 2011

Accepted  
March 8, 2012

Published  
April 30, 2012

toward suicide survivors, views on suicide (Nakamura, 1996), and views on death (Hirai et al., 2000) were administered to university students. Factor analysis of the responses identified six factors: "Rejection of Contact," "Finger-Pointing," "Confusion on Contact," "Necessity for Support," "Commiseration" and "Punitive Justice." There were significant correlations between these factors and other measures. "Rejection of Contact" positively correlated with "Active Denial," "Non-empathy," "Death Avoidance," and "Supernatural Beliefs," whereas it negatively correlated with "Empathy/Salvation." "Finger-Pointing" positively correlated with "Active Denial" and "Non-empathy." "Avoidance of Contact" positively correlated with "Death Anxiety" and "Death Avoidance." "Necessity for Supporting" positively correlated with "Empathy/Salvation," "Death Anxiety," "Death Avoidance," "Life Purpose," and "Death Concern," whereas it negatively correlated with "Active Denial" and "Non-empathy." "Commiseration" positively correlated with "Empathy/Salvation," "Rejection of Death." "Orientation to Living," "Afterlife Belief," "Death Anxiety," "Life Purpose," "Death Concern," and "Supernatural Belief," whereas it negatively correlated with "Acquiescence." "Punitive Justice" positively correlated with "Active Denial," "Non-empathy," "Afterlife Belief," "Death Relief," "Death Avoidance," and "Supernatural Belief," whereas it negatively correlated with "Empathy/Salvation." These results suggest that some views on suicide and death play a role in forming negative attitudes toward suicide survivors in university students.

<Key-words>

自死遺族、自殺観、死生観、態度、大学生

suicide survivors, views on suicide, views on death, attitudes, university students

Asian J Human Services, 2012, 2:38-50. © 2012 Asian Society of Human Services

## I. 問題と目的

日本における年間自殺者数は、1998年以降13年続けて3万人以上という深刻な状態が続いており、年齢階級別にみると自殺者全体のなかで特に中高年の占める割合が高いという傾向が続いている(内閣府, 2011)。こうした中高年世代には子どもがいる場合も珍しくなく、親を自殺で失った子どもたちの数もそれに伴って年々増加していることが考えられる。副田(2002)は、人口動態統計、国民生活基礎調査、自殺死亡統計などをもとに1999年時点で父親の自殺を経験している20歳未満の子どもが約6万3千700人、母親の自殺を経験している20歳未満の子どもが約2万6千500人と算出し、合計約9万200人もの自死遺児が日本に存在すると推定している。大学生だけでも、1年間に約2千100人が親を自殺で亡くしているのではないかという報告もある(福田, 2007)。2007年に閣議決定された自殺総合対策大綱の中では、学校における自死遺児へのケアの充実が謳われており、各教育機関において今後さまざまな支援を積極的に行っていくことが求められている。こうした状況の中、近年大学において学生相談機関を中心に従来から積極的取り組んでいる学生の自殺予防だけでなく、



大切な人を自殺で失った学生への心理支援の必要性が認識されるようになってきた(福田, 2007; 阪中, 2004)。本研究も特に大学における自死遺族学生支援を念頭においた検討を行うこととする。

親などの家族を自殺で失った自死遺族の多くは、死別後に経済的な困難だけでなく心理的困難にも直面すると考えられる。自殺実態解析プロジェクトチームによる日本の自死遺族を対象とした調査(2008)によれば、経済的困難とともに、死にたいと考えたり、抑うつ感が高かったりという心理的困難を感じている自死遺族が多くいることが明らかにされている。さらに、調査した自死遺族の過半数が自殺に対する偏見に基づいた否定的態度を周囲から向けられた経験を報告していた。このような周囲からの否定的態度については、二次被害という観点から近年議論がなされている(藤井, 2009)。自死遺族の受ける二次被害とは、自殺による死別そのものの苦痛に加えて、周囲の人々から批判的な言動が向けられることによってさらなる心理的苦痛が生じている状態のことを指す。このような二次被害に遭うことで遺族の多くは精神的にも身体的にもさらなる強いダメージを受ける可能性があり、結果的に自死遺族の悲嘆過程がより複雑なものになっているのではないかと考えられる。いくつかの実証研究においても、こうした二次被害につながるような周囲の否定的態度が他の死別体験遺族に比べて自死遺族に対して特に強く向けられることが明らかにされている(Calhoun, Selby, & Faulstich, 1980; Calhoun, Selby, & Walton, 1982)。

以上のことから、自死遺族に対する心理支援としては、遺族自身を対象としたカウンセリングや自助グループなどといった直接的支援とともに、周囲の人々がもつ否定的態度を低減させていくような啓発・教育活動も必要であるのではないかと考えられる。

こうした自死遺族に対する強い否定的態度が存在することについて、Doka(2002)は、自殺が社会で認められない死であるために、同様の否定的態度が自殺者だけでなくその遺族に対しても向けられるのではないかと述べている。つまり自殺に対する特定の態度が、自死遺族への否定的態度に深く関わっているのではないかとということである。

このような周囲の人々が抱く自死遺族に対する態度に影響を及ぼすと考えられる自殺に対する態度というのは、これまでも自殺観としていくつかの研究が行われてきた。ただしこれまでの自殺観に関する研究は、自殺観として、自殺の是非という態度のみを取り上げてきたにすぎず、自殺観の多面性を考慮してこなかったといえる(中村, 1996)。中村(1996)は自殺観というものを、“自ら命を絶つことに対する基本的な態度である”と定義して、自殺観に関する尺度を構成した。その結果、自殺行為は仕方がないことだという態度を示す「黙認」、自殺行為を強く拒絶する態度を示す「積極的否定」、自殺者にある程度理解を示す「共感・救済」、死そのものに対する恐れを示す「死への拒絶」、生きる希望をもつ必要性を強調して自殺行為を否定するような態度を示す「生への執着」、自殺について積極的には考えない態度を示す「非共感」という6つの下位尺度からなる自殺観に関する尺度を開発した。この尺度が現在日本で自殺観を包括的に捉えるために最も有効な尺度の一つであるといえよう。山中(2011)は、この自殺観に関する尺度を用いて、自死遺族に対する態度との関連を検討した。その結果、自殺行為を否定的に捉える傾向が強いと遺族との接触を拒否したり避けたり、また遺族に自殺の責任を求めるといった態度がより強くなるということが示された。さらに自殺観の「死への拒絶」の得点が高い、つまり死そのものに対して恐れる傾向が強いと、自死遺族との接触を拒否したり避けたりする傾向も強くなることが示された。以上のことから、あ

る特定の自殺観と自死遺族に対する否定的態度には関連性があることが明らかとなった。しかしこの研究にはいくつかの課題があると考えられる。第一に、この研究で作成された自死遺族に対する態度に関する尺度の内容の問題である。山中(2011)による自死遺族に対する態度に関する尺度は、「接触拒否」、「自殺責任の遺族への帰属」、「接触回避」、「遺族支援の必要性」、「同情」、そして「因果応報」という6つの下位尺度、24項目から構成されている。ただし、一般に態度というものには、感情成分が含まれることが指摘されている(山内, 1996)。にもかかわらずこの尺度には、自死遺族に対する感情、特に否定的感情が直接表現された項目がほとんど含まれていなかった。そのようなことから、自死遺族に対する態度をより包括的に検討するには、そうした遺族に対する感情も含めて測定が可能となるよう改訂する必要があると考えられる。

次に、山中(2011)では、死に対する恐れといった死そのものに対する態度も、自死遺族に対する態度に影響を及ぼしうることが指摘された。このような死に対する恐怖心は従来、自殺観というよりもむしろ死生観の一側面として扱われてきたものである。丹下(1995)は死生観を“死と生にまつわる価値や目的などに関する考え方で、感情や信念を含む”と定義して、死に関する研究においては、恐怖や不安だけではとらえきれない多面的な視点から死を扱う必要性を指摘した。高木(2007)は、阪神淡路大震災で子どもと死別した母親を対象に、周囲から受けた言葉や態度でしてほしくなかったことについて調べた。その結果、震災後生まれた子が亡くなった子どもの生まれ変わりだと周りから言われてつらかったなどといった体験が報告された。こうした言動は個人が持つ、いわゆる輪廻転生のような死に対する特定の態度と結びついたものであるといえよう。このような研究結果から、遺族に対して向けられる態度には、死生観のさまざまな側面が関わる可能性があることが考えられる。以上のことから自死遺族に対する態度に関する研究においても、山中(2011)で示されたような死に対する恐怖心だけでなく、多面的な死生観を考慮に入れた検討が必要であると考えられる。

こうした課題に基づいて、本研究では山中(2011)の自死遺族に対する態度の測定尺度項目に、新たに遺族に対する感情に関する項目を加えて、中村(1996)および丹下(1995)の定義に基づいて自殺観や死生観を多面的かつ包括的に捉えて自死遺族に対する態度との関連を検討することとする。その際に、自殺観に関しては山中(2011)同様に、多面的に自殺観を捉えることのできる中村(1996)の作成した自殺観の尺度を用いて測定する。また死生観に関しては、これまでのところ日本人の死生観をより多面的に捉えるために作成された尺度の一つとして、平井・坂口・阿部・森川・柏木(2000)による死生観尺度がある。この尺度は、あの世、霊、輪廻転生などの死後の世界を肯定する考えを示す「死後の世界観」、死を恐れたり、死のことを考えると不安になる傾向を示す「死への恐怖・不安」、死がさまざまなものからの解放であるという考えを示す「解放としての死」、死について考えることを避けようとする態度を示す「死からの回避」、自らの人生に意義を見出していることを示す「人生における目的意識」、死について積極的に思索する傾向を示す「死への関心」、死があらかじめ決められているという考えを示す「寿命観」、以上6つの下位尺度から構成されている。この死生観尺度では、このように死に対する恐怖も含めて死生観をより包括的・多面的に捉えることができる。そこで本研究でもこの平井ら(2000)による死生観尺度を用いることとする。

以上のように、本研究では、自死遺族に対する態度と自殺観・死生観との関係を明らかにすることを目的とする。具体的には大学内で自死遺族学生に接する機会が最も多いと考えら

れる周囲の学生たちの否定的態度がどのようなものであるか、またそうした態度に自殺観や死生観がどのように関わっているのかについて実証的に検討する。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

学部学生 368 名（男性 215 名、女性 88 名）に調査票を配布し、その中で記入に不備がみられなかった 308 名（男性 215 名、女性 92 名、不明 1 名）を分析の対象とした。平均年齢は、19.39 歳（ $SD=3.19$ ）であった。

### 2. 調査手続き

A 大学で開講されている心理学関連の講義中に調査票を配布し、回答を依頼した。調査票の表紙には、本調査の目的とともにプライバシーが保持されること、さらには研究目的以外に使用しないことを明記し、調査開始前に調査者が口頭でも説明した。また調査への参加は自由であること、参加したとしても途中でやめなくなった場合はいつでも回答を中断して構わないこと、さらに調査に参加することと講義の評価とは一切無関係であることをあわせて説明した。

調査終了後には、調査に回答することでかえって自死遺族に対する否定的態度が高まることのないように調査対象者全員に自死遺族に関する講義を実施した。

### 3. 調査内容

#### 1) 自死遺族に対する態度

山中(2011)による、自死遺族に対する態度に関する尺度に、特に遺族に対する感情に関する項目を追加して用いた。山中(2011)による自死遺族に対する態度に関する尺度は、「接触拒否」、「自殺責任の遺族への帰属」、「接触回避」、「遺族支援の必要性」、「同情」、そして「因果応報」という 6 つの下位尺度、24 項目から構成されている。感情に関する項目を中心に新たに作成した 19 項目をこの尺度に追加し、合計 43 項目から成る尺度を使用した。なお新たな 19 項目は、山中・田上(2009)で得られた大学生の自死遺族に対するイメージに関する自由記述データをもとに作成した。評定は 6 件法(全くあてはまらないー非常によくあてはまる)で行なった。

#### 2) 自殺観

中村(1996)の自殺観に関する尺度を用いた。この尺度は「黙認」、「積極的否定」、「共感・救済」、「死への拒絶」、「生への執着」、「非共感」という 6 つの下位尺度から構成されている。この尺度を構成している自殺観に関する 30 項目を使用した。評定は 6 件法(全くあてはまらないー非常によくあてはまる)で行なった。

#### 3) 死生観

平井ら(2000)の死生観尺度を用いた。この尺度は、「死後の世界観」、「死への恐怖・不安」、「解放としての死」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「死への関心」、「寿命観」という 6 つの下位尺度から構成されている。この尺度を構成している死生観に関する 27 項目を使用した。なお評定は 7 件法(あてはまらないーあてはまる)で行なった。

### III. 結果と考察

#### 1. 自死遺族に対する態度の因子構造

自死遺族に対する態度に関する 43 項目について因子分析（重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転）を行なった。因子負荷が.40 に満たなかった項目および複数の因子に対して.40 を超える項目を削除し、因子分析（重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転）を繰り返し行い、最終的にスクリープロットと項目内容から 11 項目を削除した 6 因子と判断した。第 1 因子に高い負荷量をもつ項目は、「家族を自殺で失った人とは、関わりたくない」「家族を自殺で失った人とは、結婚したくない」など、自死遺族との接触の拒否に関する 12 項目であった。そこで、第 1 因子を「接触拒否」因子と命名した。第 2 因子に高い負荷量をもつ項目は、「自殺を防ぐことができなかつたのは、家族にも責任がある」、「自殺した人が追い詰められているのに気づかなかつた、家族も悪い」など、自殺の原因を遺族に求める内容の 5 項目であった。そこで、第 2 因子を「自殺責任の遺族への帰属」因子と命名した。第 3 因子に高い負荷量をもつ項目は、「家族を自殺で失った人と接する際、「偏見の目で見ないように」と過剰に意識してしまう」、「家族を自殺で失った人に対して、変な遠慮がある」など、自死遺族と接触することを避ける傾向を示す内容に関する 4 項目であった。そこで第 3 因子を「接触回避」因子とした。第 4 因子に高い負荷量をもつ項目は、「家族を自殺で失った人を、日本政府や自治体は援助するべきだ」、「家族を自殺で失った人には、特別な支援が必要だ」など、自死遺族の支援に関わる 3 項目であった。そこで第 4 因子を「遺族支援の必要性」因子とした。第 5 因子に高い負荷量をもつ項目は、「家族を自殺で失うのは、とてもつらいことだ」、「家族を自殺で失った人は、一生やりきれない思いを持っている」など、自死遺族に向けられた同情に関する 5 項目であった。そこで第 5 因子を「同情」因子とした。第 6 因子に高い負荷量をもつ項目は、「家族に自殺者が出るのは、何かの罰(ばち)が当たったからだ」、「家族のなかに自殺者が出るのは、呪われているからだ」など、自殺の原因が先祖や過去の悪行であるといった考えに関する 3 項目であった。そこで第 6 因子を「因果応報」因子とした。この 6 因子構造の適合度を検討するために、6 因子すべての因子間に共分散を仮定したモデルで確証的因子分析を行なった。その結果、適合度は GFI=.83、AGFI=.80、CFI=.89、RMSEA=.07、AIC=1232.67 という値が得られた。適合度としては許容できる値が示されたといえる。なおパス係数はすべて有意であった ( $p<.001$ )。表 1 には、この最終的なモデルの分析結果を示した。

そこで本研究ではこれら 6 因子を下位尺度として、各因子に含まれる項目の平均得点を下位尺度得点とした。なお各下位尺度における  $\alpha$  係数は、表 1 に示したように「同情」が  $\alpha=.64$  と若干低いものの、すべての下位尺度についてある程度の信頼性が確認されたといえる。

以上の結果から、本研究では、山中 (2011) が作成した自死遺族に対する態度に関する尺度へ感情的側面を示す項目を追加して再検討したものの、特に感情に関して独立した因子は見いだされなかつた。むしろ山中(2011)の尺度と同様の 6 因子となった。なお、山中(2011)において信頼性係数が低かつた「因果応報」因子でより高い信頼性係数が得られた。

Received  
December 22, 2011

Accepted  
March 8, 2012

Published  
April 30, 2012



表1 自死遺族に対する態度に関する確証的因子分析の結果

潜在因子名 ( $\alpha$ 係数)	標準化係数	Mean(SD)
<b>F1: 接触拒否 (<math>\alpha=.95</math>)</b>		
19 家族を自殺で失った人とは、関わりたくない	.91	1.55(0.84)
10 家族を自殺で失った人とは、結婚したくない	.76	1.79(1.09)
7 家族を自殺で失った人は、近所に住んでほしくない	.80	1.58(0.92)
5 家族を自殺で失った人とは、一緒に学校の授業を受けたくない	.83	1.50(0.81)
17 家族を自殺で失った人とは、一緒に仕事をしたくない	.88	1.54(0.88)
34 家族を自殺で失った人のことを、好きにはなれない	.84	1.62(0.88)
32 家族を自殺で失った人とは、友人にはなりたくない	.86	1.60(0.88)
3 家族を自殺で失った人とは、一緒に暮らしたくない	.74	2.06(1.09)
39 家族を自殺で失った人は、不気味な感じがする	.74	1.97(1.09)
26 家族を自殺で失った人は、こわい感じがする	.71	2.11(1.14)
42 家族を自殺で失った人に接すると、自分も不幸になる気がする	.68	1.84(1.05)
23 家族を自殺で失った人は、幸せになれない	.64	1.80(0.99)
<b>F2: 自殺責任の遺族への帰属(<math>\alpha=.80</math>)</b>		
18 自殺を防ぐことができなかつたのは、家族にも責任がある	.83	3.58(1.29)
15 自殺した人が追い詰められているのに気づかなかつた、 家族も悪い	.75	3.61(1.21)
31 家族は自殺者にとって一番身近な存在であるので、自殺を止める ことができたはずだ	.65	3.45(1.18)
27 自殺の原因は家族にある	.61	2.49(1.12)
2 自殺者が出る家族には、もともと問題を抱えている家族が多い	.46	3.32(1.24)
<b>F3: 接触回避(<math>\alpha=.79</math>)</b>		
22 家族を自殺で失った人と接する際、「偏見の目で見ないように」 と家族に意識してしまう	.81	3.28(1.39)
11 家族を自殺で失った人に対して、変な遠慮がある	.73	3.35(1.43)
28 家族を自殺で失った人とは、どう接したらよいのか、 わからない	.76	3.37(1.47)
38 知人に家族を自殺で失った人がいたら、自殺のことが話題に ならないように配慮する	.47	4.06(1.16)
<b>F4: 遺族支援の必要性(<math>\alpha=.76</math>)</b>		
14 家族を自殺で失った人を、日本政府や自治体は援助すべきだ	.83	3.43(1.38)
30 家族を自殺で失った人には、特別な支援が必要だ	.87	3.30(1.22)
40 家族を自殺で失った人を支援する制度は、まだ不十分である	.50	3.86(1.21)
<b>F5: 同情(<math>\alpha=.64</math>)</b>		
6 家族を自殺で失うことは、とてもつらいことだ	.69	5.43(0.96)
12 家族を自殺で失った人は、一生やりきれない思いを持っている	.52	4.35(1.18)
13 人はいずれ死ぬのだから、家族を自殺で失った人も 悲しむ必要はない	-.52	1.79(0.96)
4 家族を自殺で失った人は、かわいそうだ	.51	4.43(1.29)
20 事故死や病死で家族を失った人よりも、 自殺で失った人は、強いダメージを負う	.42	4.10(1.56)
<b>F6: 因果応報(<math>\alpha=.79</math>)</b>		
24 家族に自殺者が出るのは、何かの罰(ばち)が当たつたからだ	.82	1.56(0.88)
45 家族のなかに自殺者が出るのは、呪われているからだ	.80	1.34(0.79)
8 家族に自殺者が出るのは、これまでの先祖の悪行が影響している	.67	1.64(1.02)

Received  
December 22, 2011

Accepted  
March 8, 2012

Published  
April 30, 2012



## 2. 死生観、自殺観と自死遺族に対する態度との関係

自死遺族に対する態度、自殺観、死生観の各下位尺度の平均得点および標準偏差は、表 2 に示した通りである。

表 2 自死遺族に対する態度、自殺観、死生観における各下位尺度の平均得点および標準偏差

下位尺度	
自死遺族に対する態度	
接触拒否	1.75(0.78)
自殺責任の遺族への帰属	3.30(0.90)
接触回避	3.51(1.06)
遺族支援の必要性	3.53(1.04)
同情	4.71(0.76)
因果応報	1.51(0.76)
自殺観	
黙認	3.17(0.91)
積極的否定	3.62(0.96)
共感・救済	4.78(0.77)
死への拒絶	4.23(0.72)
生への執着	4.45(0.86)
非共感	3.40(0.77)
死生観	
死後の世界観	3.81(1.60)
死への恐怖・不安	4.95(1.59)
解放としての死	3.18(1.50)
死からの回避	3.41(1.35)
人生における目的意識	3.84(1.38)
死への関心	3.95(1.32)
寿命観	3.55(1.67)

注) カッコ内の数値は、標準偏差。

Received  
December 22, 2011

Accepted  
March 8, 2012

Published  
April 30, 2012

これら自殺観、死生観と自死遺族に対する態度に関係があるかを検討するために、相関を求めた。相関の結果を表3に示した。

表3 自死遺族に対する態度と自殺観および死生観との相関

	自死遺族に対する態度					
	接触拒否	自殺責任の 遺族への帰属	接触回避	遺族支援の 必要性	同情	因果応報
自殺観						
黙認	.00	-.12	.10	-.09	-.32**	.06
積極的否定	.27**	.37**	.10	-.20**	.08	.22**
共感・救済	-.35**	-.07	-.05	.19**	.19**	-.25**
死への拒絶	-.02	-.01	.05	.12	.27**	-.08
生への執着	-.01	.11	.00	.07	.40**	-.04
非共感	.19**	.15**	-.05	-.16**	.00	.17**
死生観						
死後の世界観	.09	.06	.12	.10	.16**	.19**
死への恐怖・不安	.10	.11	.26**	.23**	.25**	.10
解放としての死	.14	.11	.03	.05	-.06	.17**
死からの回避	.28**	.14	.22**	.16**	.13	.23**
人生における 目的意識	.10	.11	.01	.15**	.18**	.11
死への関心	-.01	.01	.07	.21**	.16**	.06
寿命観	.15**	.10	.08	.01	.24**	.19**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Received  
December 22, 2011

Accepted  
March 8, 2012

Published  
April 30, 2012

まず自死遺族に対する態度と自殺観との関係については、表3に示したように「接触回避」以外の自死遺族に対する態度の下位尺度において、自殺観と何らかの有意な相関が認められた。「接触拒否」に関する結果から、自殺という行為を強く否定したり、自殺に対して積極的に考えないようにしたりする人ほど、また自殺者に共感的態度を持たない人ほど、自死遺族との接触をより強く拒むことが明らかとなった。そして「自殺責任の遺族への帰属」に関する結果から、「接触拒否」と同様に自殺という行為を強く否定したり、自殺に対して積極的に考えないようにしたりする人ほど、自殺の責任を遺族により強く求めることが明らかとなった。さらに「因果応報」に関する結果から、自殺行為を強く否定したり、自殺について考えないようにしたり、また自殺者に共感的な態度を示さない人ほど、自殺という出来事が先祖や自身の悪行に対する罰であると考えられる傾向が高いことが明らかとなった。一方「遺族支援の必要性」および「同情」といった、自死遺族に対して比較的肯定的とみなされうる態度も自殺観との間に相関がみられた。「遺族支援の必要性」に関する結果から、自殺者にある程度の理解を示すことができたり、自殺行為に対して否定的でなかったりする人ほど、自死遺族を支援する必要性を強く感じているということが明らかになった。また「同情」に関する結果から、自殺を仕方のない行為とは考えなかったり、自殺者にある程度の共感を示したり、生きる希望を持つ必要性を感じていたりする人ほど、自死遺族の心情を慮る傾向が強いことが明らかとなった。

次に自死遺族に対する態度と死生観との関連については、表3に示したように「自殺責任の遺族への帰属」以外の自死遺族に対する態度の下位尺度において、死生観と何らかの有意な相関が認められた。まず「接触拒否」に関する結果から、死について考えるのを避けようとしたり、死の時期があらかじめ決められていると考えたりする人ほど、自死遺族との接触をより強く拒むことが明らかとなった。そして「接触回避」に関する結果から、死を恐れたり、死について不安が強かったり、死について考えることを避けようとする人ほど自死遺族と接触することをより顕著に避けようとする人が明らかとなった。さらに「因果応報」に関する結果から、あの世などの死後の世界を肯定したり、死というもの解放を示すと考えたり、死のことを考えることを避けたり、人の死があらかじめ決められているなどと考える人ほど、自殺という出来事が先祖や自身の悪行に対する罰であると考えられる傾向が高いことが明らかとなった。また「遺族支援の必要性」に関する結果から、自らの人生に意義を見出したり、死という問題を積極的に考えたりする人ほど、自死遺族を支援する必要性を強く感じているということが明らかになった。ただし死を恐れたり避けようとしたりする人ほど、そうした支援の必要性を強く感じているという傾向もあわせて示された。死がとても恐ろしく深刻な問題であるために、当然そうした問題に直面した遺族への特別な支援が必要であろうと理解する傾向が示されたのではないかと考えられる。そして「同情」に関する結果から、死後の世界の存在を肯定していたり、自分の人生に意義を見出していたり、死の問題を積極的に考えたりする人ほど、自死遺族の心情を慮る傾向が強いことが明らかとなった。なお「遺族支援の必要性」と同様に、死そのものに対して恐れを感じている人ほど自死遺族の心情を慮る傾向があることも示された。死というものに対する恐れが強いために死別ということがとても深刻な事態であると捉えられて、遺族の心理的苦痛は非常に大きいものだとして理解する傾向が示されたのではないかと考えられる。この推察については、今後自死遺族に限らずさまざまな死別体験遺族に対しても同様の傾向が見られるかどうかを確認する必要があるとい

Received  
December 22, 2011

Accepted  
March 8, 2012

Published  
April 30, 2012

えよう。

以上のように「接触拒否」、「自殺責任の遺族への帰属」、「接触回避」、そして「因果応報」といった特に自死遺族に対して否定的とみなされうる態度と自殺観および死生観との間にはいくつかの興味深い関連性が示された。Smolin & Guinan (1993)は、身近な人を自死で亡くした人たちと接した時に沸いてきた、セラピストである自らの気持ちとして、自殺へ駆り立てる不吉な力に接したくないという非理性的な恐怖を感じ、さらにはその気持ちを自殺者から自死遺族らへと移しかえて、結果的に自死遺族に否定的態度を向けていたのではないかと報告している。つまり自殺に対する恐怖心・拒否感が、自死遺族に対する否定的態度を作り出している可能性があることが指摘できる。このことから考えると、本研究において「接触拒否」、「自殺責任の遺族への帰属」、「因果応報」など自死遺族に対する否定的態度と、自殺への否定的・拒否的態度に正の相関がみられたのは妥当であると考えられる。さらに本研究では自殺だけでなく広く死というものに対する拒否的態度や恐怖心などが自死遺族に対する否定的態度と関わりがあることも明らかとなり、死そのものへの恐怖心や拒否的態度を持つことが自死遺族に対する否定的態度につながる可能性が示唆された。

#### IV. まとめ

本研究では、大学生を対象に自死遺族に対する態度を測定する尺度を再構成し、自死遺族に対する態度と自殺観および死生観との間にどのような関連がみられるのかを明らかにすることを目的とした。その結果、自死遺族に対する態度に関して6因子構造が見出された。「接触拒否」、「自殺責任の遺族への帰属」といった強い否定的態度とともに、「同情」や「支援の必要性」といった自死遺族の支援につながりうる肯定的な態度の因子から構成されていることが示された。こうした自死遺族に対する否定的態度に、自殺観や死生観が深く関わるということが示唆された。すなわち自殺行為や死そのものに対して恐怖心が強かったり、拒否的であったりすることが、自死遺族に対する否定的態度と関わりがあるということが明らかとなった。ただしその一方で死そのものに対する恐怖心が高いことは、自死遺族を支援しようとする態度や自死遺族の気持ちを理解しようとする態度にも関わりがあることも示された。日本においても、近年若い世代を対象とした自殺予防教育や死生観を育む教育の重要性が叫ばれている。大学においては医学、看護、薬学など医療系の学部には所属する学生を対象とした教育だけでなく、幅広くさまざまな学部には所属する学生を対象にそうした教育の実践が行われ始めている(海老根, 2008; 阪中, 2005)。こうした死の問題を扱った教育活動が直接自死遺族の問題を取り上げないとしても、大学生の自死遺族に対する態度形成に影響を及ぼす可能性があることが本研究の結果からも示唆される。そのことから、死生観を育む教育や自殺予防教育を実施する教育者が、本研究で明らかとなった自死遺族に対する態度と死生観・自殺観との関わりを理解したうえで授業を実施していくことが、結果的に自死遺族支援にもつながるのではないかと考えられる。

ただし本研究の限界及び課題として、以下の点が挙げられる。

まず、本研究で検討した自死遺族に対する態度に関する尺度についてである。尺度の再検討を行ったものの、遺族に対する感情を測定できるような因子は見いだされなかった。今後遺族に対する感情に関わる尺度項目を再検討して、そうした感情が態度の中にどのように構



成されうるのかについて詳細な検討が必要であると考えられる。また、下位尺度のうち「同情」の $\alpha$ 係数が若干低かった。「同情」に関わる項目についてもあわせて検討する必要があると考えられる。

次に、自殺観と死生観との関わりについてである。本研究では、自死遺族に対する態度と自殺観・死生観との関連を検討したが、今後この死生観と自殺観との関連を詳細に検討することによって、自死遺族に対する態度形成に関する包括的なモデルを提案できるのではないかと考えられる。

## 付記

本研究は、第12回ヨーロッパ心理学会議で発表したものに一部加筆修正を行なったものです。本研究の調査にご協力くださいました大学生の皆様、心よりお礼申し上げます。

## 文献

- 1) 海老根理恵(2008) 死生観に関する研究の概観と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 48, 193-202.
- 2) Calhoun, L.G., Selby, J.W., & Faulstich, M.E.(1980) Reactions to the parents of the child suicide: A study of social impressions. *Journal of consulting and clinical psychology*, 48, 535-536.
- 3) Calhoun, L. G., Selby, J. W., & Walton, P. B.(1982) Suicidal death of a spouse: the social perception of the survivor. *Omega: Journal of Death and Dying*. 16, 283-288.
- 4) Doka, K, J.(2002) *Disenfranchised grief: New directions, challenges and strategies for practice*. Champaign, IL: Research Press.
- 5) 福田真也(2007) 大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック - 精神科と学生相談からの15章 - 金剛出版.
- 6) 平井啓・坂口幸弘・阿部幸志・森川優子・柏木哲夫(2000) 死生観に関する研究□死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証 死の臨床, 23, 71-76.
- 7) 藤井忠幸(2009) 自死遺族の受難—「二次的被害」についての考察 現代のエスプリ, 501, 41-49.
- 8) 自殺実態解析プロジェクトチーム(2008) 自殺実態調査 2008 第二版.
- 9) 内閣府(2011)平成23年版 自殺対策白書.
- 10) 中村真(1996)青年の自殺に関する研究 I - 大学生の自殺観と自殺志向との関連性 - 臨床心理学研究, 33, 18-25.
- 11) 阪中順子(2004) 学校における自殺予防教育—自殺予防プログラムを実施して こころの科学, 118, 19-23.
- 12) Smolin, A., & Guinan, J.(1993) *Healing after the suicide of a loved one*. New York: Simon & Schuster.

- 13) 副田義也(2002) 自死遺族について・再考 母子研究, 22, 21-37.
- 14) 高木慶子(2007) 喪失体験と悲嘆 - 阪神淡路大震災で子どもと死別した 34 人の母親の言葉 医学書院.
- 15) 丹下智香子(1995) 死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 42, 149-156.
- 16) 山中亮(2011) 大学生における自死遺族に対する態度と自殺観との関連 自殺予防と危機介入, 31, 43-50.
- 17) 山中亮・田上恭子(2009) 自死遺族に対する大学生の態度に関する探索的研究 臨床心理学, 9, 382-387.
- 18) 山内隆久(1996) 偏見解消の心理 - 対人接触による障害者の理解 - ナカニシヤ出版.

Received  
December 22,2011

Accepted  
March 8,2012

Published  
April 30,2012

## CONTENTS

### REVIEW ARTICLE

- A Paradigm Shift in Rehabilitation Medicine:  
From “Adding Life to Years” to “Adding Life to Years and Years to Life” ..... **Masahiro KOHZUKI, et al.** • 1

### ORIGINAL ARTICLES

- Compatibility of Market and Publicness in Community Service  
Innovation Programs of South Korea ..... **Gi-Yong YANG** • 8
- Relation between sports activity experience and individual  
attributes of students with intellectual disabilities in  
high-school special needs education programs ..... **Hideyuki OKUZUMI, et al.** • 21
- A Study on the Relationship between the Community  
Organizing Movement and the Emergence of Social Enterprise in Korea  
- Focused on Relationship with Self-Sufficiency Project - ..... **Moon-Kuk LEE** • 29
- Attitudes toward suicide survivors, perspectives on suicide  
and death among Japanese university students ..... **Akira YAMANAKA** • 38
- Development Process and the Actual Situation of Social Business in Japan ..... **Hong-Gi KIM** • 51
- Psychological Effects of a program combining exercise with group work:  
Toward the development of an effective program for patients with diabetes mellitus ..... **Kyoko TAGAMI, et al.** • 67
- A Evaluative Research of the Effectiveness of the Voluntary Elder Ombudsman ..... **Jung-Don KWON, et al.** • 81
- The Characteristics of Children with Physical Disabilities and the Curriculum  
and Teaching Method for Them in the Special Needs Education ..... **Chang-Wan HAN, et al.** • 94
- Categorization of Consumption Expenditure and Analysis of the Factors  
Affecting It- For Households with Elderly Members who Participated in  
an Employment Promotion Project for the Elderly in 2011 - ..... **Gi-Min LEE, et al.** • 116
- Relationship between Stress-appraisals and Depression among the  
Institutionalized Elderly in Korea ..... **Jae-Jong BYUN** • 136
- Relationship between Teacher Mental Health that Involved in Special  
Needs Education and Stressor  
- From the Analysis of Mental Health Check for Teachers - ..... **Kohei MORI, et al.** • 144
- The current situation of schoolchildren that seems developmental  
disorders in general education ..... **Aiko KOHARA, et al.** • 156

### SHORT PAPERS

- Implications of Community-Based Human Service Program of South  
Korea in the Process of Establishing Health Support System  
for the Weak People for Disasters ..... **Keiko KITAGAWA, et al.** • 166
- A study on the development and the issue of the small-scale sheltered  
workshop for the persons with disabilities in Taiwan ..... **Chen Liting, et al.** • 176
- A comparative study on Quota System in Japanese and Korea ..... **Moon-Jung KIM, et al.** • 193